

山形県河北町元泉地区における地域主導の「ふるさと教育」

Community-led hometown education in Motoizumi, Kahoku Town, Yamagata pref.

○嶺田拓也・重岡 徹

MINETA Takuya, SHIGEOKA Tetsushi

1. はじめに

山形県河北町の元泉地域農地・水・環境保全組織（以下、保全組織）では、2007 年から多面的機能支払交付金（旧農地・水環境保全部管理支払交付金）による地域資源の適切な保全・管理に向けた活動のなかで、地元産メダカの保全など地域の子どもたちに対する環境学習や農作業体験イベントを通じ、将来の地区や農業の担い手になりうる子どもたちに地域や農村の魅力を伝え「ふるさと意識」を醸成する活動に積極的に取り組んできた。2015 年からは、地域資源の次世代への継承をさらに推進するために、元泉地区を学区に持つ小学校のクラブ活動のカリキュラム枠内で、田園農地周辺の自然、歴史、文化的資源を町内の子供たちとともに再発見するプログラム「おらだ田んぼの子ども博士養成講座」を開設し（嶺田 2016）、農研機構農村工学研究部門もプログラム設計等に協力している。

小学校と連携し多面的機能支払いを活用した地域主導のクラブ活動による「ふるさと教育」が開始されてから 5 年目を迎え、これまでの取り組みの概要、クラブ活動枠でのプログラム実施のなかで浮き彫りになった課題に加え、醸成されつつある成果を報告する。

2. 「おらだ田んぼの子ども博士養成講座」の経緯と概要

保全組織では、2014 年秋頃より地元小学校と連携した恒常的な取り組みとしてのふるさと教育を検討してきた。元泉地区を学区に持つ河北町立 Y 小学校との話し合いのなかで、高学年（4～6 年生）を対象としたクラブ活動の一つを保全組織が全面的に設計・支援できることになり、「自然生活体験クラブ」を「おらだ田んぼの子ども博士養成講座」として運営が可能となった。講座のコンセプトは、今後の地域を担う次世代の子供たちに元泉や河北町の生活基盤である里地農地周辺の自然、歴史、文化的資源を再発見・探求するプログラムの提供による、ふるさとが大好きな子供たちの育成である。主な活動場所は元泉地域内 3 カ所のビオトープ水田やその周辺とし、野外活動に際しての観察用具や特別講師に対する経費等は地域に交付される多面的機能支払交付金を充てている。活動の特徴としては、①山形県が推進する探究型学習（アクティブ・ラーニング）を意識した自発的な活動を担保する補助機材としてデジタルカメラや図鑑等の活用、②専門的知識を有する外部講師を積極的に活用し、高い知識や技術に触れさせる機会の提供、③活動終了後の修了書や認定書の授与による受講経験の固定化、などが挙げられる。保全組織の役割としては、会長が企画・運営を統括するとともに、学校側との総合調整にあたっている。また環境保全米栽培も行っている地区の中核農家がビオトープ水田の管理を担当し、観察ほ場も提供している。野外活動に際して周辺環境の草刈りなどは多面的機能支払交付金による活動の一環として実施している。各活動のプログラム立案や運営には元小学校校長（元県理科教育委員会）と筆者がサポートに加わっている。小学校側では、クラブ担当教諭がクラブ員の募

*農業・食品産業技術総合研究機構 National Agriculture and Food Research Organization
キーワード：環境教育，農村振興

集，児童への諸連絡，引率や活動時間管理を行っている。また，外部講師として，これまで伊丹市立昆虫館館長，宇都宮大学農学部，地元の管理栄養士などを招いている。

3. ふるさと意識の醸成効果の検討

「おらだ田んぼの子ども博士養成講座」受講児童の農村の生きものやふるさとに対する意識の変化を検討するために，2017年度のクラブ活動開始時（5月26日）と終了時（11月10日）に「田んぼ」や「農村の生きもの」，「ふるさと」に関する簡単なアンケートを実施した（対象28名）。対照群として，同じ規模の「科学クラブ」の児童30名にもクラブ活動前後に同じ設問のアンケートを実施した。自由回答で名前が挙げた農村生物をまとめてみると，受講前の認識には対照群とあまり差がなかったが，終了後の回答ではカエルやアメンボ，トンボなど一般的にもよく知られている農村生物で対照群の認識率が高くなったが，実際に野外活動のなかで出会ったガムシ，コオイムシ，イナゴ，スズメ，そしてヨモギなどの植物の認識率は対照群より高くなった（図1）。また，河北町の良いところを尋ねたところ，受講前後で「川がきれい」「田畑が多い」など町内の自然資源を挙げた回答者が多くなった（図2）。これらから，プログラム受講により農村地帯に位置するふるさとの生物や自然環境に対する意識が高まったとみなすことができた。

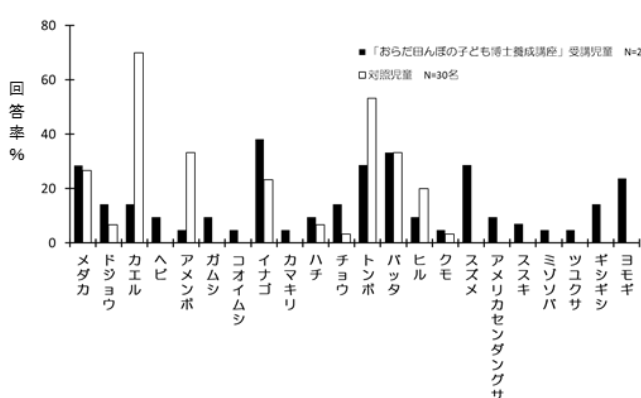


図1 クラブ終了時の農村生物に対する認識率
Recognition rate for rural living things at the end of the club

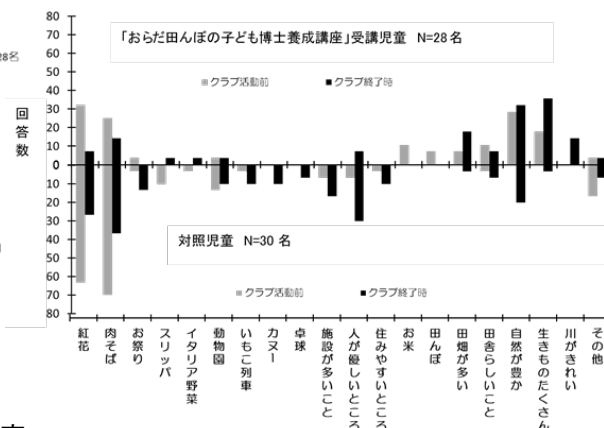


図2 河北町に対する好感度の向上
(クラブ活動前後のアンケートを集計)
Improvement of the positive attitude towards Kahoku Town

4. 地域と学校連携における課題と可能性

クラブ活動枠での「ふるさと教育」の課題としては以下のことが挙げられる。

- 1) 年間の活動日が7～10回と少なく，活動時間も計12～15コマ（1コマ：45分）程度で，年次による割り当て時間も変わるため，体系的なプログラムが組みにくい。
- 2) 活動日が少ないこともあり，自然観察や自然体験にとどまることが多く，農村の資源を材料とした自発的な「深い学習」まで至らない。

一方，「遊び」感覚で農村と触れあうことができたこと，異学年からなる班単位の活動によって知識や経験の継承がみられたこと，子どもたちが撮影した写真をその場でプリントしてふり返しを行い活動の記録・記憶が固定化できたことから，連続して受講する児童が増加するなど，子どもたちの満足度は高いと思われた。加えて，クラブ活動の運営を通じ，地域が有する豊かな教育材料が地元で再認識され，農村の教育機能に気づいたことも特記される。引用文献1) 嶺田拓也(2018)：小学校教育と連携した農地・水・環境保全組織主導の地域教育の取り組みー山形県河北町元泉地区の事例からー，平成28年度農業農村工学会大会講演要旨集，S-17-3.